

台湾駐在・再訪記

一般財団法人
ベンチャーエンタープライズセンター
理事長 市川 隆治

1. 台湾駐在時期

2002年から2006年の4年間、交流協会台北事務所副代表として台湾に駐在する機会を得た。

(1) 台中関係

当時は民進党・陳水扁政権まっただ中であつたが、台中間の政治的軋轢とは裏腹に既に100万人からの台湾人ビジネスマンが大陸で活躍し、台湾と中国は経済的には切っても切れない縁となつていた。大陸に出張して台湾IT企業の工場を視察すると、広々とした敷地に緑豊かな大学のキャンパスのような環境で、テニスコートも何面か整備されていた。将来の工場拡張も考えて広い敷地を確保したとのことであつたが、台湾の本社は古ぼけたビルでしかないというのが大方の台湾企業とのことだつた。大陸は広く、台湾は小さいということを改めて実感した。上海から南京に向かうとどこまで行っても見渡す限りの平原が続くが、その距離が台湾の島の南北の距離に相当するのだ。

大陸には地域ごとに台商協会が組織され、普段から学校や道路建設に寄付金を取めているので、多少の無理は台商協会が言えば当局は聞いてくれるので、日系企業も是非我々を活用してほしいと言われたが、これが同じ中華民族だからこそできる大陸でのビジネスのコツだと感じた。

(2) 台湾新幹線

駐在期間中に台湾新幹線の建設が佳境に入つていた。経緯としては初め欧州勢が落札したもの

を、地震に強く、電車方式であるために操車場の面積が小さくて済む等の理由で日本勢が逆転受注したもので、ベースには欧州方式が色濃く残っており、日本の技術陣は日本の新幹線を欧州方式の仕様に順応させるのに大変苦労したと聞いた。当時新聞では「欧日混血」と書かれていた。運転席のボタンの数とか位置は、台湾側の発注に基づき日本の新幹線のものとはだいぶ違うものになっており、そういうこともあって運転士の日本での養成ができず、営業開始から数年は俸給が相当高いフランスのTGVの運転士を雇うはめになった。また、日本のものではないフランス製の券売機とかオーストラリア製の洗車機とかには当初不具合が出たようだ。離台直前には計器類を積み込んで走る試験走行にも同乗できた。交通部長も乗り、メディアに対し、走行中でもテーブル上のコインが倒れないことを示し、乗り心地がいいことをアピールしてくれていた。

(3) 大地震と原子力政策

当時、日本の原子力政策についてあるセミナーで一生懸命練習した中国語で説明したことがあることを思い出す。まだ原発が順調だった頃のことである。その後2011年3月11日の東日本大震災で状況は大きく変わってしまった。大震災に対する義捐金については台湾から断トツの多額が贈られたことは記憶に新しいところであるが、これには経緯があると思う。

赴任間もない頃、台湾中心部の南投県に出張する機会があつた。何の準備や予備知識もないまま

式典に参加したところ、地元の町長さんから日本には大変感謝していると花束を贈呈された。これは1999年9月21日のマグニチュード7.6の集集大地震の際、日本がいち早く救急隊を派遣し、大変助かったことに対するお礼ということであった。震源地の小学校の校庭はちょうど真ん中に1メートル強の断層ができ、平らであるはずの運動会のトラックが見事に分断されてしまっていた。校舎も、位置と揺れの方向から被害が全く異なったが、一番被害を受けた校舎は1階部分がくしゃけていた。もちろんこのときは前任者のときで、彼によれば台北市内も大きく揺れ、アパートのエレベーターも止まってしまい、11階の部屋まで階段で上がるしかなく、大変な思いをしたそうである。台北市内でもビルが倒壊し、空き地となっているところも私の赴任時にはあった。古代、台北の辺りは湖であり、その後水が干上がって盆地となったため、地盤が軟弱であるということも聞いたことがある。

3.11に対する多額の義捐金は、このときのお返しという意味もあると思う。お互いに地震国で、一方が被災したときは他方が助けるという美しい関係が日台間にはあると思う。しかし、3.11の影響は台湾の原子力政策にも色濃く反映され、延び延びになっている第4原発の建設はストップしている。

現在ベンチャー企業が果敢にロボット開発に挑戦しており、瓦礫の中の生存者を発見するのに、例えば蛇型ロボットは小さな隙間さえあれば中に入っていけるので、有望と思われる。

(4) 台北 101 ビル

その頃、世界で一番高いビルだった「台北 101 ビル」も日本の技術で建てられたものであり、住んでいたアパートの玄関を出たところでちょうど見えたので、毎日少しずつ高くなるのを見守って

いた。熊谷組が中心となり、エレベーターは世界最高速のギネス記録を持つ東芝製。余りに速いので耳がツンとしないように電子制御の空気圧調整装置がついている。ビル全体については、オフィス面積が広すぎてなかなか床面積が埋まらなかったと聞いている。地震について聞いてみると、鉄の杭を地中奥深く、岩盤まで到達させてその上に建てているので、台北中のビルが倒れてもこのビルは大丈夫との答えが返ってきた。また、揺れを吸収するための巨大な鉄球が上層階に設置され、見学もできるようになっている。

当時建設中であった大規模施設としては名古屋近郊の中部新国際空港（セントレア）もある。天気が良ければ日台間を往復する飛行機の中から、海上に柁が作られ、だんだん埋め立てられていく様子を見ることができて飛行機に乗るのが楽しみだった。

(5) 東南アジアと台湾

駐在期間中に大陸以外にも、台湾人が活躍している東南アジア各国を訪問することができた。特に印象に残っているのはベトナム南部の商業都市ホーチミンである。台湾でもスクーターの多さには驚かされたが、ホーチミン中心部ではスクーターと自転車の海の中を車が何とか泳いでいるのではないかと思われるほどであった。しかし、少し郊外に出ると舗装もなくなり、お世辞にも立派とは言えないあばら家でものを売っている光景が続く。そんな中で台湾人実業家は私財を投じて工場団地を整備し、日系をはじめとした外国企業の受け入れを目指していた。

当時 JETRO ホーチミン事務所と連携して日台ビジネスセミナーを開催したところ盛況となり、特に台湾人ビジネスマン側からは、普段は敷居が高くて会えない日系企業幹部とセミナーの場で面会することができ、ビジネスのきっかけを作る

ことができ、大変有意義であったとのうれしいコメントを頂いた。

東南アジアや世界中に華僑のネットワークがあり、困ったときにはお互いに助け合う仕組みとなっているようであるが、日本の研究者によれば、決して過大視してはならず、華僑と一口に言っても台湾系、広東系、客家系等々、いくつかの系列に分かれ、それぞれの中には厳しい上下関係があり、内紛もあるということである。

(6) 2004年総統選挙

在任中1回だけ2004年に総統選挙を観察する機会を得た。2000年に政権交代を果たした民進党の陳水扁・呂秀蓮組対国民党の連戦・親民党の宋楚瑜組の戦いであった。

民進党側は二・二八事件に合わせて2月28日に100万人超を動員して台湾の北から南までを人間の鎖でつなく(手をつなく)パフォーマンスを挙行した。これはソ連支配下のバルト3国が静かな抗議として実施していたものを手本としているが、文字通り静かで、台北市内にも人間の鎖がつながったが、通行人が通ろうとすると道を開けてくれた。

これに対し、国民党・親民党側のデモンストレーションは賑やかであった。台北市内の目抜き通りを総統府に向けて行進したのだが、トラックに乗せた大きな太鼓をドーンと叩きながら進むので、お腹にも響くような感じであった。

投票日前日に遊説中の陳水扁と呂秀蓮の乗った車が銃撃され、陳水扁が腹を縫う負傷を負い、呂秀蓮も足にかすり傷を負うという事件が起きた。これで選挙の流れが変わったという分析をする人もいる。

投票率は80.28%と日本では考えられないくらいの高率で、結果は得票率でわずか0.22%の差で陳水扁・呂秀蓮組が辛勝した。この後銃撃は自作

自演ではないかとの抗議もあったが、票の数え直しをしても結果は同じであった。

余りに国民の関心が高く、かつ、その差がわずかであったため、社会的にいろいろの問題が出たと言われている。両陣営のどちらの運動に参加したのかがある程度分かってしまうので、夫婦間や親子間、友人間で口論になったという報告もあった。

いずれにせよ台湾人の選挙好きを認識できて興味ある選挙であった。

(7) 日本人は匠、台湾人は商人

一般論だが、「日本人は匠、台湾人は商人」というのが4年間の台湾駐在の結論だ。日本人は技術にこだわり目指す技術レベルに達しない限り研究開発を遠々と続けるのに対し、台湾人は適当なところでとにかく商品にして売りさばき、その儲けで次のビジネスを手掛けるというスタイル。日本のベンチャーがいまいち大きな成長機会を逸しているのも事業化に対する台湾人のような情熱に欠けることに原因があるのではないかと最近考えている。従って、匠の日本人と商人の台湾人がうまく連携すれば眠れる技術も宝の山に変わるのではないかと大いに期待される。

2. 第1回台湾再訪

2006年に帰国して以後、なかなか台湾と接点のあるポジションに就かなかったため、8年間のブランクができてしまった。しかし、昨年4月下旬、再び台湾を訪れる機会を得た。

(1) インフラの発展

国際線は桃園国際空港に集中させていたものが、羽田-松山便ができ非常に便利になった。桃園国際空港からはバスで台北市内まで50分くらいかかったが、松山空港は台北市内北部にあり、しかも8年前はMRTが空港まで到達しておら

ず、タクシーか路線バスでホテルに向かうしかなかったが、今は MRT と直結している。

かつて住んでいたアパートの近くで、1 施設当たりでは台北 1 売上があると言われる太平洋 SOGO デパートが、すぐ隣接地にさらに大きな新館をオープンしていた。タクシーで通りかかり、最初に新館が目に入り、こんなに大きかったかなという印象とともに、位置関係がおかしいなと感じたが、聞いてみると 8 年前にはなかった新館であった。一方、当時から新光三越デパートは台北市役所近くにどんどん新館を建設し、勢いが良かったが、現在では台湾全土で 13 か所を数えるまでになっているということであった。台南にも台湾新幹線駅の小ぶりの店舗に加え、町の中心部に大型店舗を構えていた。台湾駐在当時にはじめて台北市内に新設され、洒落た感じのショッピングモールとしてよく利用していた微風広場も 4 店舗に拡大している。ちなみにコンビニはセブンイレブンが 5 千店舗、ファミリーマートが 3 千店舗弱と過当競争とも言えるほどの盛況ぶりである。

台北市役所近くの高層ビルから眺めると、新しい高層ビルができているのと、国父記念館のすぐ裏に巨大なドームを建設中なのが目に入った。高雄市には台湾新幹線で行ったが、8 年前ようやく試運転にこぎつけたものが立派に営業運転をしていた。

このようにインフラ面では台湾の新たな発展の息吹を感じることができた。

(2) 航空機部品産業

その高雄では航空機部品製造業の中小企業 2 社を訪問した。いずれも工場拡張中で、設備についても 1 台 1 億円は下らないマザック等の精密工作機械を 230 台も揃え、高精度精密部品製造を実践していた。航空機部品製造にはボーイングやエアバスの厳しい品質検査をパスしなければならないが、両社ともたくさんのそうした Certification を壁に掲げていた。つい 7 年前は町工場であったということであるが、短期間のうちに膨大な設備投資により急成長した。これぞ entrepreneurship であり、安定を好む日本の中小企業オーナーとは



訪問したうちの一家、「晟田科技工業股份有限公司」



たくさんの国際認証が高品質の証明

対極の台湾企業の神髄を見た気がした。台湾ではファウンドリーをはじめとした半導体産業がつとに有名で、そちらはスマホの頭打ちで少し調子が悪いようであるが、航空機部品のような新分野で成長株が出てきたということである。

(3) 台湾の葬儀

知人がなくなり、葬儀にも出席できなかったので、ご遺族に無理を言って墓参りをさせてもらった。台湾のお墓は地べたに置かれた小ぶりの家の形をしており、結構カラフルである。そのような伝統的なお墓を想像していたところ、全く違っていた。連れて行ってくれたのは、台北を見下ろす北部の山の中にある 20 階はあろうかという立派なタワーであった。中には厳かな仏像があり、上の階には骨壺を入れるロッカーがずらりと並んでいた。遺族が受付で鍵を受け取ると、当該番号のロッカーの扉を開けることができ、故人を懐かしみながら手を合わせることができる仕組みとなっている。伝統的には葬儀で紙幣に見立てた紙を燃やす風習があると聞いていたが、その伝統は生きていた。台湾元札、日本円札、米ドル札、ユーロ札に似せた「冥土銀行」の札束や紙製のシャツや靴や自動車、はてはビール、タバコ、スマホ、化粧道具や金の延べ棒を売っており、故人があので困らないようにそれを専用の竈で遺族が燃やすようになっていた。

3. 第 2 回台湾再訪

さらに昨年 11 月上旬にもう一度台湾を訪れることとなった。今回はいろいろな「台湾〇〇の父」と称される先人の偉業を学ぶ機会となった。

(1) 台湾蓬莱米の父

台湾大学のキャンパスの一隅に「磯小屋」がある。1925 年に建てられ、昨年蓬莱米命名 88 周年の“米寿”を祝った「舊臺北高等農林學校作業室」

である。それは「台湾蓬莱米の父」と讃えられる磯永吉博士(1886-1972)と「台湾蓬莱米の母」と称される末永仁(すえながめぐむ)技師(1886-1935)の木造の研究室で、建物のみならず中には机や手回し計算機や謄写版なども当時のまま残されている。当時の在来米は日本人の口に合わなかったため、改良を重ね「蓬莱米」と総称される現在の米を作り上げたということだ。3～4 千年前の炭化した米の標本もあり興味深かった。元来、米は今より小粒で、稲の先端のひげが 10 センチ位長かったということだ。そこから長年の品種改良で現在の米ができあがっている。奇美実業の許文龍氏によるおふたりの彫像が飾られていたが、氏は「その土地に功績のあった人は敬意をもって記念すべき」との考えでこれを寄贈したということである。幸運にもその 2 日後に当のご本人と台南のご自宅で面会することができた。

(2) 嘉南大圳の父

「嘉南大圳の父」は烏山頭ダムを建設した八田與一技師(1886-1942)である。当時最先端のセミ



八田與一技師の銅像

ハイドロリックフィル工法によって建造された同ダムは1920年～30年まで10年の歳月をかけて竣工したが、これにより荒地であった嘉南平原を灌漑し、9万ヘクタールの農地を出現させ、嘉南平原を台湾最大の穀倉地帯とし、現在もなお満々と水を湛えて立派に機能を果たしている。八田記念公園には八田宅をはじめ、技師たちの宿舎が復元されているが、中に同姓の市川宅があったのが面白かった。ダムの一番高い所に八田與一技師の銅像があるが、台北在任中に訪れた際にはまだ何もなく、ここに将来銅像が建立される予定との説明を受けたのを思い出した。

(3) 台湾糖業の父

「台湾糖業の父」は『武士道』で有名な新渡戸稲造博士(1862-1933)である。新渡戸は同郷の後藤新平民政長官から請われ、1901年に台湾総督府の技師に任命され、「糖業改良意見書」を提出し、台湾における糖業発展の基礎を築いた。高雄市橋頭區橋南里のその名も「糖廠路24號」という住所に1901年に設立された台湾で最初の新型機械製糖工場がある。輸入砂糖に押された今はもう稼働しておらず、「台湾糖業博物館」として当時を偲ばせている。サトウキビの運送、圧搾、洗浄、蒸留、



各地のサトウキビ畑からサトウキビを運んだ機関車

結晶、分解から包装に至る全生産過程を分かりやすく写真や絵、さらには映像で説明している。大がかりな機械修理工場もあり、自分たちで故障した機械の修理や機器改善の設計をしていたということである。木造瓦屋根平屋の日本時代の工場長宿舎も残されている。場内案内途中に防空壕があり、垂直の竪穴を梯子でよじ登る場面もあった。

(4) 許文龍氏との会見

そうした日本の明治・大正時代の偉人たちの偉業に思いを馳せるのとは別に、台湾の實在の偉人、許文龍氏と台南のご自宅で会見する榮譽に浴した。氏は奇美実業のABS樹脂の成功、また、最近では奇美電子のテレビの液晶パネルの成功にもかかわらず、そのご自宅は台南の民家がひしめく中にあり、とてもそのような富豪の家とは思えない質素なものであった。地元のガイドさんも氏の名前は知っていたがそこがご自宅とは想像もできなかったと語っていた。「自分の事務所とか住まいは簡単でよく、別に自分を偉く見せる必要はない」というのが氏のポリシーである。また、外来政権の国民党の治世に比し、日本統治の50年間のインフラ整備をはじめとした「領土の延長」としての治政を評価し、現在の日本人もその歴史をしっかりと学ぶべきと指摘された。

儲けたお金の使い方については、従業員、医療



壮麗な佇まいの奇美博物館

そして文化のために使うという氏独自の3分割法という考え方があるということであった。医療については既に3つの病院を創設し、この度文化事業ということで、30年間のコレクションを展示する「奇美博物館」が建設され、そのヨーロッパの城を思わせる立派な佇まいには圧倒された。左右対称の庭園に置かれた彫刻だけで10年かけてイタリアの専門家に依頼したということだ。中の展示品もバイオリンや絵画、動物の剥製をはじめと

して氏の趣味を色濃く反映したものとなっている。

インタビュー録の中で氏は、ものごとは一面だけではなく、「その前後にある問題をひっくるめて全体的に相互連関的に考える」必要があり、「生態学的に」みなければならないと指摘しているが、これは正に現在我が国においてベンチャーに関して「ベンチャーエコシステムの確立」を議論しているのと相通ずるところがあると思った。